

ソーシャル・サポートと母親の愛着スタイルが 育児ストレスに与える影響

塚本 伸一*

Influence of Social Support and Attachment Styles on Child-rearing Related Stress

Shinichi TSUKAMOTO*

The relationship between perceived social support, mother's attachment styles, and child-rearing related stress were investigated. Participants were mothers of kindergarteners (N =137). They completed the Adult Attachment the Scale, the Social Support Scale, and the Child-Rearing Related Stress Scale. The results of a path analysis indicated the following. (1) 'Secure' attachment had a positive effect on perceived social support. (2) 'Avoidant' attachment had an adverse effect on perceived social support. (3) Perceived social support had adverse effects on two child-rearing related stress factors. (4) 'Anxious/ambivalent' attachment had no effect on perceived social support but had direct positive effects on two child-rearing related stress factors. The implications of these results for the discussion on intergenerational transmission of attachment styles between children and mothers are discussed.

key words: social support, attachment style, child-rearing related stress, kindergartener's mother

問 題

厚生労働省(2019a)によると、2018年度に、全国の児童相談所が対応した児童虐待相談件数は159,850件であり、過去最多となっている。虐待の内容で最も多いのが、心理的虐待の88,389件(55.3%)であり、続いて、身体的虐待40,256件(25.2%)、ネグレクト29,474件(18.4%)、性的虐待1,731件(1.1%)の順になっている。心理的虐待は前年度からの増加率においても22%と最も大きくなっている。さらに、厚生労働省(2019b)によれば、被虐待児は7~12歳の小学生が33.7%と最も多く、次いで3~6歳児が25.7%となっている。また、虐待者は実母の

割合が47.0%と最も高い。

このような虐待には、母親の育児にかかわる心理的ストレス、すなわち育児ストレスが関係していることが指摘されており(Cindy & Robin, 1999)、この観点からの研究がいくつか行われている(中谷・中谷, 2006; 花田・永江・大石・本田, 2007)。

心理的ストレスは、Lazarus & Folkman(1984)の認知的評価モデルによると、一連のプロセスとして捉えることができる。あるストレスフルな出来事に遭遇した場合、どのような感情や反応が生起するかは、両者を媒介する認知的評価が規定している。この認知的評価は一次的評価と二次的評価の2段階から成り、ソーシャル・サポートなどの状況変数と効力

* 立教大学現代心理学部心理学科

Department of Psychology, Faculty of Contemporary Psychology, Rikkyo University, 1-2-26 Kitano, Niiza-shi, Saitama 352-8558, Japan.

期待, 信念, コミットメントといった個人変数の影響を受けている。

状況変数であるソーシャル・サポートとストレスとの関連については, 膨大な研究が行われている(浦1992)。しかし, 育児ストレスに限れば, ソーシャル・サポートとの関係を直接検討した研究は多くない。井上・柳田・深見・深野(2014)は, 保育園に通う子どもの母親235名を対象に, 夫婦親密性サポート, 家族サポート, 実行されたサポートと育児ストレスの関係を検討し, ストレス認知の低い群では, いずれのサポートも高いことを明らかにしている。また, 野澤・大内・萩原(2019)は, 保育所に通う乳幼児の母親1,715名を対象に質問紙調査を実施し, 夫サポートと友人サポートが育児ストレスを低減することを明らかにしている。

ストレス過程に影響する個人変数としては, Lazarus & Folkman (1984) が述べる変数以外に, 成人の愛着スタイルも重要と考えられる。それは, 愛着スタイルがストレスの認知的評価, 対処, 感情的反応にかかわることが理論的に明らかだけでなく(Shaver & Mikulincer, 2002), 実際に, 軍事訓練(Mikulincer & Florian, 1995), 大学入学(Lopez & Gormley, 2002), 中絶(Cozzarelli, Sumer, & Major, 1998), 不妊症(Amir, Horesh, & Lin-Stein, 1999), 妊娠(Mikulincer & Florian, 1999), 作業負荷(Raskin, Kummel, & Bannister, 1998), 経済的問題(Bartley, Head, & Stansfeld, 2007), 失業(Hobdy, Hayslip, Kaminski, Crowley, Riggs, & York, 2007), パートナーとの不仲(Besser & Priel, 2009)といった具体的な事象, さらに, 不快なノイズ(Quirin, Pruessner, & Kuhl, 2008), 認知課題(Kidd, Hamer, & Steptoe, 2011)などの実験的に導入した刺激も含め, 多くのストレス要因との関係が明らかになっているからである。

これらの研究によると, 愛着の不安/両価型は, ストレスフルな出来事を脅威と評価し, 自分の対処資源は不足していると認知する傾向がある(Cozzarelli, Sumer & Major, 1998; Mikulincer & Florian, 1998)。一方, 回避型は, 不安/両価型同様ストレスフルな出来事を深刻に評価するものの, 対処資源の評価には関連が見られなかった(Williams & Riskind, 2004)。この違いについて, Mikulincer & Shaver (2007) は, 回避型は自分が傷つきやすく,

援助や支援を受けるために他者に依存する必要があることを認めたがらないからだと解釈している。また, ストレスフルな事象に対する対処方略について検討した研究(Holmberg, Lomore, Takacs, & Price, 2011)によると, 不安/両価型は, 感情に焦点を当てた対処を報告する傾向があるのに対し, 回避型は, ストレスの否認, 注意の転換といったストレスと距離を置く方略を報告する傾向が見られた。さらに, ストレスフルな状況で, 安定型と回避型, 不安/両価型を含む不安定型の感情的反応を比較した研究(Amir, Horesh & Lin-Stein, 1999)によると, 不安定型ではネガティブな感情が強く生起するのに対して, 安定型では, ストレスフルな状況とそれ以外の状況の間で感情に顕著な違いはなく, ストレスフルな状況でも比較的落ち着いているとしている。

このように, 様々なストレスフルな状況について, 愛着スタイルの影響が検討されているが, ソーシャル・サポート研究同様, 直接育児ストレスを取り上げた研究は少ない。南(2013)は, 乳幼児を持つ母親142名を対象に, 詫摩・戸田(1988)を改変した尺度による愛着スタイルと育児ストレスとの関係を検討し, 概して安定型は育児ストレスと正の, 不安/両価型, 回避型は負の相関があることを見出しているが, 分析は単純相関の検討に止まる。

ところで, ソーシャル・サポートと愛着スタイルは, それぞれストレス過程に影響する状況変数と個人変数として, 別個に研究が行われているが, 愛着スタイルとソーシャル・サポートの間には密接な関連があることも指摘されている(Sarason, Levine, Basham, & Sarason, 1983; Thompson, 2005)。岩崎・五十嵐(2010)は, 大学生を対象に愛着スタイルと知覚されたソーシャル・サポートとの関係を検討したところ, 愛着の安定型と家族サポート, 友人サポートの間には有意な中程度の正の相関, 回避型と家族サポート, 友人サポート, 恋人サポートの間には有意な中程度の負の相関が存在するが, 不安/両価型では一部に極めて弱い負の相関が見られるだけで, ほとんど無相関であることを報告している。また, 村上・櫻井(2014)は, 小学4, 5, 6年生を対象に検討を行った結果, 愛着スタイルと母親, 父親, きょうだいなどのソーシャル・サポートの間に有意な相関があることを報告している。

愛着スタイルとソーシャル・サポートの関連に関

する研究結果を考慮すると、愛着スタイルとソーシャル・サポートは相互に関連なく独立してストレス過程に影響を与えるのではなく、一方が他方を媒介してストレス過程に影響するといった、より複雑な関係性が存在する可能性も推測される。そこで本研究では、愛着スタイルとソーシャル・サポートが、相互にどのような関係をもって育児ストレスに影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

先述の研究によると、安定型は親密な他者を信頼し、友情を感じやすいこと(Hazan & Shaver, 1987)、安定型とソーシャル・サポートの間に正の相関がみられること(岩崎・五十嵐 2010)から、安定型はストレス状況でソーシャル・サポートの存在と有効性を期待し、これがストレス認知を低減する方向で影響するものと予想される。これに対して、回避型は、ストレス状況で援助の必要性を認めず(Mikulincer & Shaver, 2007)、他者との親密な関係を避ける傾向があること(Pietromonaco & Barrett, 1997)、回避型とソーシャル・サポートの間に負の相関が存在すること(岩崎・五十嵐 2010)から、安定型とは逆に、ソーシャル・サポートの不在や回避がストレス認知に影響するものと予想される。不安/両価型は相手に対する信頼感が弱い(Hazan & Shaver, 1987)一方、親密性を過剰に求める傾向もあり(Pietromonaco & Barrett, 1997)、他者との関係に一貫性を欠くこと、不安/両価型とソーシャル・サポートには相関がみられないこと(岩崎・五十嵐 2010)から、不安/両価型は、ソーシャル・サポート期待とは無関係にストレス認知が生起する可能性がある。

方 法

対象者

虐待と育児ストレスに関する研究の動向を踏まえ、本研究では、虐待が小学生に次いで多い幼児の母親を対象とした。S県K市内のA幼稚園に子どもを通わせている母親137名を対象として、2015年11月に調査を実施した。

測定

育児ストレス尺度 育児ストレスに関するわが国の先駆的研究である佐藤・菅原・戸田・島・北村(1994)の尺度、佐藤ら(1994)の尺度の短縮改良版と言える田中・難波(1998)の尺度を参考として育児ストレス尺度を作成した。佐藤ら(1994)、田中ら

(1998)の尺度は、子ども関連育児ストレス(ストレスサー)と母親関連育児ストレス(ストレス状態・反応)を想定して尺度を構成しているが、母親の虐待行為に直接影響するのは、母親自身のストレス状態・反応と推測される。そこで、本研究では、母親関連育児ストレスを取り上げるとともに、対象者の負担を考慮して10項目から成る簡便な尺度を構成することとした。尺度項目は、「子どもにどう接すればよいかわからない」、「母としてやっていける自信がある(逆)」などから構成される。各項目について、4件法による評定を求めた。

成人愛着スタイル尺度 戸田(1988)によって作成された尺度を用いた。この尺度は、Hazan & Shaver(1987)が成人における愛着スタイルの3タイプ(安定型、回避型、不安/両価型)を測定するために考案した強制選択法による尺度から、各タイプを構成する特性を抽出し、多項目から成る尺度に再構成したものである。尺度項目は、「私は知り合いができてやすい方だ」、「気軽に頼ったり頼られたりすることができる」、「人は、本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」、「自分を信用できないことがよくある」、「どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう」、「人は全面的には信用できないと思う」といった18項目から構成される。各項目について4件法により評定を求めた。

ソーシャル・サポート尺度 松崎・田中・古城(1990)、竹田・岩立(1999)を参考に、30項目からなるソーシャル・サポート尺度を作成した。尺度項目は、「つらいときや困ったとき相談する」、「自分の考えや意見を率直に交し合える」、「自分自身をわかってくれたり、高く評価してくれる」などの6場面から構成され、各場面に、サポートの送り手として夫、両親、夫の両親、友人、きょうだいがどの程度該当するか、4件法で評定を求めた。

結 果

育児ストレス尺度の検討

育児ストレス尺度10項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から2因子構造を妥当と判断した。因子負荷量を検討したところ、2因子ともに.35に満たない負荷量を示す項目が2項目(「自分

Table 1 育児ストレス尺度の因子分析

	I	II
意欲喪失 ($\alpha = .70$)		
育児意欲がある (逆)	.752	.048
子どものおかげで私が成長している (逆)	.642	-.221
子どもと楽しく遊べる (逆)	.554	.001
子どもの将来が楽しみである (逆)	.480	.001
母としてやっていける自信がある (逆)	.388	.201
困惑戸惑 ($\alpha = .65$)		
子どもにどう接すればよいのかわからない	.080	.723
この先どう子どもを育てるのかわからない	.042	.677
夫を煩わせて悪い	-.180	.488
因子間相関		.339

の時間が持てない」, 「子どもを放り出したい」)存在したため, これを削除し, 再度同様の因子分析を行った。その結果, 残りの8項目は全て, 2因子のいずれかに.35以上の負荷量を示していたことから, この8項目を採用した (Table 1)。

第1因子は, 「育児意欲がある (逆)」「子どもの将来が楽しみである (逆)」「母としてやっていける自信がある (逆)」など5項目から構成され, 育児への意欲や手ごたえのなさ, 自信の喪失を表す項目から構成されていることから「意欲喪失」と命名した。第2因子は, 「この先どう子どもを育てるのかわからない」「子どもにどう接すればよいのかわからない」等3項目から構成されており, 子育てに対する戸惑いや困惑を表す項目から構成されていることから「困惑戸惑」と命名した。

尺度の信頼性を検討するために, クローンバックの α 係数を因子ごとに算出した。「意欲喪失」は $\alpha = .70$, 「困惑戸惑」では, $\alpha = .65$ であった。必ずしも高い値ではないことから, 項目の付加による改善も想定されたが, 対象者の負担を考慮した少数項目の尺度構成が目的であることから, そのまま用いることとした。

本尺度の項目は, 先述のように母親のストレス状態・反応の測定を目的としたものである。抽出された2因子は, いずれも育児に関連して母親に生起するストレス状態と考えることができ, 本尺度は, 内容の妥当性, 因子の妥当性を有していると判断される。

各因子を構成する項目の1項目あたりの平均値を各下位尺度得点, 下位尺度得点を単純加算したものを育児ストレス全体得点とした。

成人愛着スタイル尺度の検討

成人愛着スタイル尺度18項目について, 最尤法, プロマックス回転による因子分析を行ったところ, 固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から3因子構造を妥当と判断した。因子負荷量を検討したところ, すべての因子に.35に満たない負荷量を示す項目が1項目 (「私は人に頼らなくても, 自分一人で十分にうまくやっていけると思う」)存在したため, これを削除し, 再度同様の因子分析を行った。その結果, 17項目全てが, いずれかの因子に.35以上の負荷量を示していたことから, この17項目を最終的な尺度項目とした (Table 2)。各因子を構成する項目を検討すると, 第1因子, 第2因子, 第3因子の各項目は, 全て戸田 (1988) の3因子の項目に対応していた。そこで, 戸田 (1988), 詫摩・戸田 (1988) に従い, 本研究の第1因子を「安定性」, 第2因子を「不安/両価性」, 第3因子を「回避性」と命名した。

尺度の信頼性を検討するために, クローンバックの α 係数を因子ごとに算出した。「安定性」は $\alpha = .84$, 「不安/両価性」は $\alpha = .81$, 「回避性」では, $\alpha = .66$ であった。「回避性」の値は, 必ずしも高いものではないが, 項目内容は戸田 (1988) に一致すること, 本尺度が Bowlby (1973) に基づくものであることから, 新たな項目を付加せず, このまま用いることとした。

各因子を構成する項目の1項目あたりの平均値を各下位尺度得点とした。

ソーシャル・サポート尺度の検討

ソーシャル・サポート尺度6項目を送り手別に最尤法による因子抽出を行い, 固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から全て1因子構造と判断した (Ta-

Table 2 成人愛着スタイル尺度の因子分析

	I	II	III
安定性 ($\alpha = .84$)			
私はすぐ人と親しくなる方だ	.798	.038	.038
私は知り合いが得意やすい方だ	.790	.112	-.046
私は人に好かれやすい性質だと思う	.729	-.047	.019
はじめて会った人でもうまくやっていける自信がある	.723	-.049	-.024
たいていの人は私のことを好いてくれると思う	.571	.013	.070
気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.523	-.086	-.120
不安/両価性 ($\alpha = .81$)			
人は本当はイヤイヤながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	.016	.752	.200
自分を信用できないことが良くある	-.059	.729	-.133
時々友達が本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある	.058	.680	.161
ちょっとしたことで、すぐ自信を無くしてしまう	-.031	.657	-.079
私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人から疎まれてしまう	.152	.579	-.034
あまり自分に自信がもてない方だ	-.268	.499	-.184
回避性 ($\alpha = .66$)			
どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられるとイヤになってしまう	.127	.018	.767
あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められると、イライラしてしまう	.078	-.009	.623
あまり人と親しくなるのはすきでない	-.344	.011	.441
人に頼るのは好きでない	-.187	-.182	.378
人は全面的に信用できないと思う	-.122	.020	.350
因子間相関	I	-.325	-.336
	II		.313

Table 3 ソーシャル・サポート尺度 (夫) の因子分析

	I
ソーシャル・サポート ($\alpha = .88$)	
つらいときや困った時相談する	.952
自分の考えや意見を率直に交わし合える	.928
自分のことをわかってくれる	.921
いっしょに行動して楽しい	.829
安心して一緒にいることができる	.815
自分のことを必要としてくれる	.777

ble 3)。尺度の信頼性を検討するために、クローンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .88 \sim .95$ であった。

送手別ソーシャル・サポート得点間の相関を求めたところ有意な相関が認められたことから、「ソーシャル・サポート」という単一の高次因子の存在が予想された。そこで高次因子分析を行った結果、適合度は、 $\chi^2 = 5.92$ $df = 5$ $p = .31$, $GFI = .980$, $AGFI = .940$, $CFI = .982$, $RMSEA = .040$ であり良好であった。そこで、送手別ソーシャル・サポートは一つの高次因

子「ソーシャル・サポート」で説明されると判断されたため、以下の分析では、送手別得点を単純加算したソーシャル・サポート得点を用いる。

分析 1

愛着スタイル研究には、個人を特定のタイプに分類する類型論的アプローチと個人の特性に注目する次元論的アプローチが存在する(坂上・菅沼, 2001; 岩崎・五十嵐, 2010)が、分析 1 では、類型論的観点から分析を行う。

類型論的に検討するため、まず愛着スタイルの分類を行った。安定性、不安/両価性、回避性の 3 つの下位尺度について Z 得点を算出し、3 得点のうち、個人内で最も高い得点を示したものを、当該人物の愛着タイプとした。この方法を用いたのは、詫摩・戸田 (1988) が基礎とする Hazan & Shaver (1987) は強制選択法によりタイプを抽出していることから、これに準じた方法を採用したものであり、類似の方法は坂上・菅沼 (2001) も使用している。

愛着タイプ間にソーシャル・サポート認知の違いが存在するかを検討するために、愛着タイプを独立

Table 4 愛着タイプ別平均値, 標準偏差

	安定型	不安/両価型	回避型	F 値	
ソーシャル・サポート	15.30 (2.05)	14.13 (2.66)	13.89 (2.35)	4.33*	安>不/両
意欲喪失	1.64 (0.44)	1.82 (0.45)	1.86 (0.58)	n.s.	
困惑戸惑	1.50 (0.49)	2.19 (0.63)	1.68 (0.61)	15.03**	不/両>安=回
育児ストレス全体	3.14 (0.71)	4.01 (0.82)	3.53 (0.96)	10.98**	不/両>安=回

* < .05 ** < .01

Table 5 変数間の相関係数

	サポート	意欲喪失	困惑戸惑	育児ストレス
安定性	.45**	-.26**	-.30**	-.36**
不安/両価性	-.21*	.25**	.55**	.53**
回避性	-.36**	.26**	.15	.25**
サポート		-.39**	-.31**	-.44**

**p<.01 *p<.05

変数, ソーシャル・サポート得点を従属変数とする 1 要因分散分析を行ったところ, 愛着タイプの効果が有意 ($F(2,113)=23.64, p<.05$) であった。Tukey 法による多重比較を行った結果, 安定型は回避型よりもソーシャル・サポート得点が有意 ($p<.05$) に高かった。

次に, 愛着タイプ間に育児ストレスの違いが存在するかを検討するために, 愛着タイプを独立変数, 意欲喪失, 困惑戸惑, 育児ストレス全体の各得点を, それぞれ従属変数とする 1 要因分散分析を行った。その結果, 困惑戸惑 ($F(2,113)=15.02, p<.01$) と育児ストレス全体 ($F(2,113)=10.98, p<.01$) で, 愛着タイプの効果が有意であった。Tukey 法による多重比較を行った結果, 困惑戸惑では, 不安/両価型が安定型 ($p<.01$), 回避型 ($p<.01$) より有意に高かった。また, 育児ストレス全体でも同様に, 不安/両価型が安定型 ($p<.01$), 回避型 ($p<.05$) より有意に高かった (Table 4)。

分析 2

分析 2 では, 愛着スタイルを次元論的にとらえ, 愛着スタイル, ソーシャル・サポート, 育児ストレス間の関連を検討する。各変数間でピアソンの積率相関係数を求めたところ (Table 5), 安定性とソーシャル・サポートには有意な正の相関 ($r=.45, p<.01$), 意欲喪失 ($r=-.26, p<.01$), 困惑戸惑 ($r=-.30, p<.01$), 育児ストレス全体 ($r=-.36, p<.01$) とは有意な負の相関が認められた。不安/両価性とソーシャ

ル・サポートには有意な負の相関 ($r=-.21, p<.05$), 意欲喪失 ($r=.25, p<.01$), 困惑戸惑 ($r=.55, p<.01$), 育児ストレス全体 ($r=.53, p<.01$) とは有意な正の相関が認められた。また, 回避性とソーシャル・サポートには有意な負の相関 ($r=-.36, p<.01$), 意欲喪失 ($r=.26, p<.01$), 育児ストレス全体 ($r=.25, p<.01$) とは有意な正の相関が認められた。回避性と困惑戸惑の間には有意な相関は認められなかった。さらに, ソーシャル・サポートと意欲喪失 ($r=-.39, p<.01$), 困惑戸惑 ($r=-.31, p<.01$), 育児ストレス全体 ($r=-.44, p<.01$) の間には有意な負の相関が認められた。

続いて, 愛着スタイルの違いは, 直接育児ストレスに影響すると同時に, ソーシャル・サポート認知を媒介しても育児ストレスに影響を及ぼすと想定してモデルを設定し, パス解析による検討を行った (Figure 1)。分析にあたっては, モデル内の変数間に想定しうる全てのパスを仮定し, 5% 水準で有意とならなかったパスは削除しながら分析を繰り返した。最終的なモデルの適合度を検討すると, $\chi^2=3.39, df=6, p=.76, GFI=.990, AGFI=.966, CFI=1.000, RMSEA=.000$ であり, 適合度は非常に良好であった。

分析の結果, 安定性は, ソーシャル・サポートに有意な正の, 回避性は有意な負の影響を与えており, さらに, ソーシャル・サポートは, 意欲喪失と困惑戸惑にそれぞれ有意な負の影響を与えていた。他方, 不安/両価性からソーシャル・サポートへの影響は見

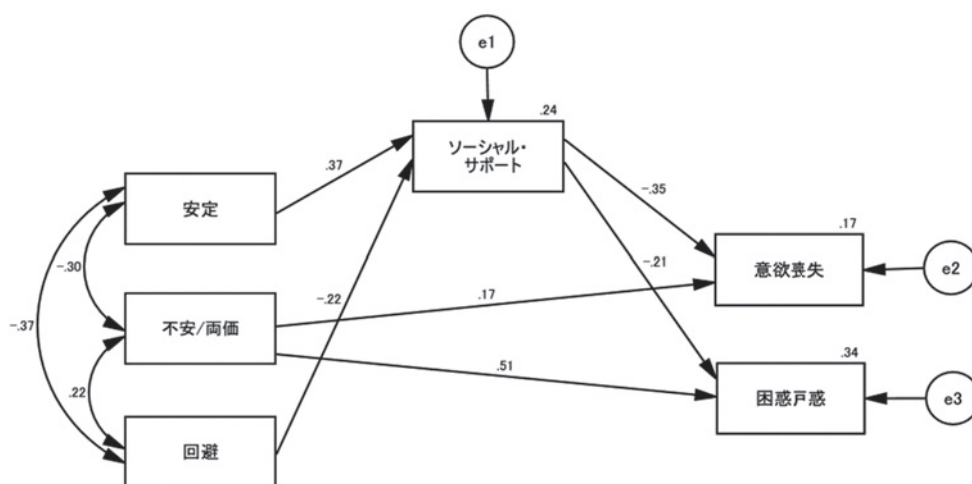


Figure 1

られず、意欲喪失と困惑戸惑に直接有意な正の影響を与えていた。

考 察

種々の心理学的ストレスに、状況的変数であるソーシャル・サポートや個人的変数である愛着スタイルが及ぼす影響については多くの研究が行われてきているが、近年深刻化する児童虐待に深く関与するとも指摘される (Cindy & Robin, 1999) 育児ストレスとの関連を検討した研究は多くないことから、本研究では、幼稚園児の母親を対象に、ソーシャル・サポートと母親自身の愛着スタイルが育児ストレスに及ぼす影響を検討した。また、ソーシャル・サポートと愛着スタイルが相互に密接な関連がある (Sarasohn et al., 1983 ; Thompson, 2005 ; 岩崎・五十嵐, 2010) ことが指摘されながら、従来のソーシャル・サポートと育児ストレスの関連、愛着スタイルと育児ストレスの関連は、それぞれ独立して検討されてきたことから、本研究ではソーシャル・サポートと愛着スタイルがどのような関係を持ちながら育児ストレスに影響を与えているのかを明らかにしようとした。

従来、愛着スタイル研究には、個人を特定のタイプに分類する類型論的アプローチと個人の特性に注目する次元論的アプローチが存在することから、まず、類型論的観点から、母親の愛着スタイルを安定型、不安/両価型、回避型に分類して分析を行ったところ、

愛着タイプ間にソーシャル・サポートの違いが認められ、安定型は回避型よりもソーシャル・サポート認知が有意に高いことが明らかになった。

また、不安/両価型は、安定型、回避型より育児ストレスが高いことも明らかになった。この結果は、概ね Cozzarelli, Sumer, & Major (1998), Williams & Riskind (2004) に沿ったものである。

続いて、次元論的観点から、愛着スタイル、ソーシャル・サポート、育児関連ストレス間の関連を検討したところ、安定性とソーシャル・サポートに有意な正の相関が認められ、また、不安/両価性、及び回避性にはソーシャル・サポートとの間には有意な負の相関が認められた。これは、岩崎・五十嵐 (2010), 村上・櫻井 (2014) を支持するものである。

さらに、愛着スタイルの違いは、直接育児ストレスに影響すると同時に、ソーシャル・サポート認知を媒介しても育児ストレスに影響を及ぼすとのモデルを設定して分析を行ったところ、安定性は、ソーシャル・サポートに有意な正の、回避性は有意な負の影響を与えており、さらに、ソーシャル・サポートは、意欲喪失と困惑戸惑にそれぞれ有意な負の影響を与えることが明らかになった。すなわち愛着スタイルの安定性は、親近者が辛い時に相談にのってくれる、自分をわかってくれるというサポート期待を強く持つことが、育児に自信がない、どう育てればよいかわからないといった育児のストレスを低減させる効果を持つものに対して、回避性は親近者のサポート期待

を低く見ることによって、育児ストレスを増幅させるものと考えられる。これに対して、不安/両価性は、サポート期待に影響せず、育児に対する自信の喪失や戸惑いといった育児ストレス認知を直接昂進する働きをもつものと考えられる。

安定型は、親密な他者に信頼感を抱き (Hazan & Shaver, 1987)、関係性を維持して、コミュニケーションを促進しようとする傾向がある (Shaver & Mikulincer, 2014) こと、ストレスフルな状況でも過剰に感情喚起することなく、通常と同じような平静を保てる (Amir et al., 1999) ことから、ストレス対処の資源としてソーシャル・サポートの有効性を強く認知し、育児における過度なストレス評価を行わないことを本研究結果は示しているものと解釈できる。

回避型は、他者との親近性や親密さに不快感を抱き、他者との距離を最大化して、自律的に独立して行動することを志向する (Shaver & Mikulincer, 2014) こと、愛着システムの活性化を避けるため、自己の感情から注意をそらし、不安、怒り、悲しみといったネガティブな感情だけでなくポジティブな感情も過少評価し (Mikulincer & Shaver, 2007)、いわば「平板な」感情認知をすることから、ソーシャル・サポートには有意な負の関連が認められた一方で、育児ストレス認知には直接の影響が見られなかったものと考えられる。

愛着対象を一貫して強く信頼する安定型、一貫して親密さを避け、距離をおく回避型と異なり、不安/両価型は、保護や支援を強く求める欲求とそれへの疑念が同居する (Cassidy & Kobak, 1988) ことから、他者に対する態度が一貫せず、サポート認知との間に明確な関連が認められなかったものと考えられる。他方、不安/両価型は、ストレス状況の深刻さと脅威の存在を誇張し、ネガティブな感情状態を過大視する (Cassidy & Berlin, 1994; Shaver & Mikulincer, 2002) 傾向があることから、育児ストレスの2因子ともに有意な関連が認められたものと解釈される。

本研究から、虐待に影響する (Cindy & Robin, 1999) とされる母親の育児ストレスに、ソーシャル・サポートが持つ緩和効果は、母親の愛着スタイルによって異なる可能性が示唆された。すなわち、安定愛着では、窮状を支援する者の存在が育児ストレスを

低減させるが、不安/両価では、支援者の存在は育児ストレスに関連せず、回避においては、支援者の存在が、逆に育児ストレスを昂進するということである。厚生労働省 (2013) は、虐待の発生を予防するためには、相談体制の整備等子育て支援サービスの充実が重要としているが、本研究結果を勘案すると、母親の特性に応じたきめ細かな支援が必要ということである。

なお、本研究で使用した尺度のうち、育児ストレス尺度、成人愛着尺度では、一部の下部尺度の α 係数が必ずしも十分な値ではなかった。今後は、項目の付加等により改善をはかる必要がある。

ところで、数井・無藤・園田 (1996) は、母親と幼児期の子どもを対象に、母親の育児ストレスが子どもの愛着の安定性に及ぼす影響を検討し、有意な負の関連を見出しており、母親が親として抱くストレスが子どもの愛着の安定性を低下させると解釈している。本研究は母親の愛着スタイルが育児ストレスに及ぼす影響を検討したものであるが、数井ら (1996) の結果と合わせて考えると、母親自身の愛着スタイルは育児ストレスのあり方を媒介して、子どもの愛着スタイルに影響する可能性が示唆される。すなわち、愛着の世代間伝達が、育児に対する母親の態度や認知、感情を媒介して成立する可能性を示唆しているものと解釈することもできる。愛着の世代間伝達のメカニズムを実証的に明らかにする方法を示していると考えられることもでき、興味深い。今後の課題である。

引用文献

- Amir, M., Horesh, N., & Lin-Stein, T. 1999 Infertility and adjustment in women: The effects of attachment style and social support. *Journal of Clinical Psychology in Medical Settings*, **6**, 463-479.
- Bartley, M., Head, J., & Stansfeld, S. 2007 Is attachment style a source of resilience against health inequalities at work? *Social Science and Medicine*, **64**, 765-775.
- Besser, A., & Priel, B. 2009 Emotional responses to a romantic partner's imaginary rejection: The roles of attachment anxiety, covert narcissism, and self-evaluation. *Journal of Personality*, **77**, 287-325.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss, Vol. 2: Separation*. New York: Basic Books.
- Cassidy, J., & Kobak, R. R. 1988 Avoidance and its relationship with other defensive processes. In J., Bel-

- sky, & T., Nezworski (Eds.), *Clinical implications of attachment*. Hillsdale, NJ: Erlbaum, pp. 300-323.
- Cassidy, J., & Berlin, L. J. 1994 The insecure/ambivalent pattern of attachment: Theory and research. *Child Development*, **65**, 971-981.
- Cindy, L. M., & Robin, D. P. 1999 *Child maltreatment: A introduction*. London: Sage Publications.
- Cozzarelli, C., Sumer, N., & Major, B. 1998 Mental models of attachment and coping with abortion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 453-467.
- 花田裕子・永江誠治・大石和代・本田純久 2007 潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度の基準関連尺度による信頼性・妥当性 保健学研究, **19**, 51-58.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Hobdy, J., Hayslip, B., Kaminski, P. L., Crowley, B. J., Riggs, S., & York, C. 2007 The role of attachment style in coping with job loss and the empty nest in adulthood. *International Journal of Aging and Human Development*, **65**, 335-371.
- Holmberg, D., Lomore, C. D., Takacs, T. A., & Price, E. L. 2011 Adult attachment styles and stressor severity as moderators of the coping sequence. *Personal Relationships*, **18**, 502-517.
- 井上和博・柳田信彦・深見真也・深野佳和 2014 保育園児を持つ母親の育児ストレスとその関連要因との関係 鹿児島大学医学部保健学科紀要, **24**, 35-42.
- 岩崎真和・五十嵐透子 2010 大学生における sense of coherence とアタッチメント・スタイルおよび知覚されたソーシャル・サポートの関連 兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科 教育実践学論集, **12**, 71-81.
- 数井みゆき・無藤 隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について 発達心理学研究, **7**, 31-40.
- Kidd, T., Hamer, M., & Steptoe, A. 2011 Examining the association between adult attachment style and cortisol responses to acute stress. *Psychoneuroendocrinology*, **36**, 771-779.
- 厚生労働省 2013 子ども虐待対応の手引き. https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/dl/120502_11.pdf
- 厚生労働省 2019a 平成 30 年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数<速報値>. <https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/000533886.pdf#search>
- 厚生労働省 2019b 平成 30 年度福祉行政報告例の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/18/dl/gaikyo.pdf>
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.
- Lopez, F. G., & Gormley, B. 2002 Stability and change in adult attachment style over the first-year college transition: Relations to self-confidence, coping, and distress patterns. *Journal of Counseling Psychology*, **49**, 355-364.
- 松崎 学・田中宏二・古城和敬 1990 ソーシャル・サポートの供与がストレス緩和と課題遂行に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **30**, 147-153.
- Mikulincer, M., & Florian, V. 1995 Appraisal of and coping with a real-life stressful situation: The contribution of attachment styles. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 406-414.
- Mikulincer, M., & Florian, V. 1998 The relationship between adult attachment styles and emotional and cognitive reactions to stressful events. In J. A., Simpson, & W. S., Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press, pp. 143-165.
- Mikulincer, M., & Florian, V. 1999 Maternal fetal bonding, coping strategies, and mental health during pregnancy: The contribution of attachment style. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **18**, 255-276.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. 2007 *Attachment in adulthood: Structure, dynamics, and change*. New York: Guilford Press.
- 南 憲治 2013 母親の育児ストレスとその関連要因－愛着と成育歴の影響－ 帝塚山大学現代生活学部紀要, **9**, 75-83.
- 村上達也・櫻井茂男 2014 児童期中・後期におけるアタッチメント・ネットワークを構成する成員の検討－児童用アタッチメント機能尺度を作成して－教育心理学研究, **62**, 24-37.
- 中谷奈美子・中谷素之 2006 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響 発達心理学研究, **17**, 148-158.
- 野澤義隆・大内善広・萩原康仁 2019 サポート活用効力感の相違によるソーシャル・サポートの育児ストレスへの影響の検討 心理科学, **40**, 1-12.
- Pietromonaco, P. R., & Barrett, L. F. 1997 Working models of attachment and daily social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1409-1423.
- Quirin, M., Pruessner, J. C., & Kuhl, J. 2008 HPA system regulation and adult attachment anxiety: Individual differences in reactive and awakening cortisol. *Psychoneuroendocrinology*, **33**, 581-590.
- Raskin, P. M., Kummel, P., & Bannister, T. 1998 The relationship between coping styles, attachment, and career salience in part nered working women with children. *Journal of Career Assessment*, **6**, 403-416.
- Sarason, I. G., Levine, H. M., Basham, B., & Sarason, B. R.

- 1983 Assessing social support: The social support questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 127-139.
- 坂上裕子・菅沼真樹 2001 愛着と情動制御 一人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連— 教育心理学研究, **49**, 156-166.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則 1994 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, **64**, 409-416.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. 2002 Attachment-related psychodynamics. *Attachment and Human Development*, **4**, 133-161.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. 2014 Adult attachment and emotion regulation. In J. J., Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation*. (2nd), New York: Guilford Press, pp. 237-250.
- 竹田小百合・岩立京子 1999 ソーシャル・サポートが育児ストレスにおよぼす効果について —特定のサポート源の違いおよびサポートに対する必要度との関連から— 東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学, **50**, 215-222.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度—成人愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- 田中宏二・難波茂美 1998 育児ストレスにおけるソーシャル・サポート研究の概観 岡山大学研究集録, 177-185.
- Thompson, R. A. 2005 Multiple relationships multiply considered. *Human Development*, **48**, 102-107.
- 戸田弘二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル—作業仮説 (working models) からの検討— 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人 ソーシャル・サポートの社会心理学 サイエンス社.
- Williams, N. L., & Riskind, J. H. 2004 Adult romantic attachment and cognitive vulnerabilities to anxiety and depression: Examining the interpersonal basis of vulnerability models. *Journal of Cognitive Psychotherapy*, **18**, 7-24.

(受稿: 2020.3.11; 受理: 2020.9.4)
